

ロータリーとは・・・

2005-06 年度 2650 地区 ロータリー情報委員会
副委員長 杉田 博

新しい環境に移ったとき、私たちには慣れ親しめる努力が必要になります。1905 年、弁護士ポール・ハリスが鉱山技師、石炭商と洋服仕立人である異業種 4 人でスタートしたロータリーの組織が今世界の 168 カ国、クラブ数 32,462、会員数 1,209,790 人(2005 年 12 月末)、日本ではクラブ数 2,325、会員数 101,407 人(2006 年 1 月末)を擁する大組織にふくれあがりました。その結果、ロータリーのプログラムも多様化し、要望される奉仕の需要を満たすためにも財政的な基盤拡大が必要になりました。そのためには、会員を増強することが急務になってまいりました。



←ロータリーの創始者 (左より)

シルベスター・シール (石炭商) / ポール・ハリス
(弁護士) / ハイラム E ショーレー (洋服仕立人)
/ ガスターバス E ローア (鉱山技師)

ロータリーは長きにわたり職業奉仕という倫理哲学の高揚を掲げてまいりました。ポール・ハリスは社会に役立つ人間になるにはいろいろな方法があるが、最も身近で効果的な方法は、自分の職業にあると説きました。そして、高い倫理規範に忠実に裏打ちされた職業観こそ職業奉仕であると主張しました。また、ポール・ハリスは職業奉仕とは、会員一人ひとりが自分の職業の倫理的水準を高めることによって社会に貢献していくことであって、会員個人個人の自己練成の場がロータリーであると説いています。



アーサー・シェルドンは職業奉仕理念を分かりやすく表現した。

1910 年 職業奉仕概念を導入(第 1 回全米ロータリー・クラブ連合会)

「仲間に最もよく奉仕する者は、最も多く報いられる」

1911 年(第 2 回全米ロータリー・クラブ連合会)

「仲間に最もよく奉仕する者は、最も多く報いられる」

He profits most who serves best(2001 年に They profit most who serve best に変更)



フランク・コリンズは Service, not self 「無私の奉仕」(自己の利益だけでなく他人に奉仕することが重要である)

1911 年(第 2 回全米ロータリー・クラブ連合会)

Service above self 「超我の奉仕」に繋がるといわれている。



アーチ・クランプ

1917年RI会長時にロータリー基金の重要性を説き、今日のロータリー財団の種まきとなった。

「さまざまな社会奉仕を今まで通り続けていこうと思うなら、世界で善を成すための寄付金を受け取ることは極めて適切なことだと思われる」と語った。

ロータリーの精神的基盤は？・・・決議「23-34」



ウィル・メーニア Jr.; 職業奉仕と社会奉仕の理念の調和を図りロータリーの分裂の危機を救う

手続要覧の社会奉仕の章に「社会奉仕に関する 1923 年の声明」として詳細に記載されています。社会奉仕活動に対する方針の 23-34 の本文は、ロータリーのバックボーンとも言うべき重要決議で、これは 1923 年国際大会（セントルイス）で単一プログラム「手足の不自由な子供たち」に重点を置くことを否認し、34 号では奉仕プロジェクトに関するクラブの自立

性についてのロータリーの方針を確立された。

その後 5 回程追加補正が行われました。その中に『ロータリーは基本的には一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕―「超我の奉仕」(Service above self)―の哲学であり、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践理論の原理に基づくものである。』

この前文に記されたロータリーの人生哲学と実践倫理は最も肝要な部分で、何人もこれを書き換えることのできないほどの名言であり、ロータリーの精神的基盤です。その他社会奉仕を実施するに際しての諸注意事項が列挙されていますが、この決議は、単に社会奉仕のみでなく、あらゆるロータリーの奉仕活動のあり方、基本を示したものとしてロータリー活動実践の拠り所として熟知しなければならないとされています。

四つのテスト



ハーバート・テラー

1932 年、倒産寸前のクラブ・アルミニウム社再建のために考え、実践したスローガン。1954 年その版權を RI に寄贈

The Four-Way Test

Of the things we think, say or do

- 1) Is it the TRUST?
- 2) Is it FAIR to all concerned?
- 3) Will it build GOODWILL and BETTER FRIENDSHIPS?
- 4) Will it be BENEFICIAL to all concerned?

私たちが考えたり、言ったり、行ったりする際の指針にしよう。



チェスレー・ペリー
ポール、シエルドンとシカゴクラブの対立
全米 16 クラブの連合会設立
クラブ・・・親睦 連合会・・・理念提唱・拡大
事務総長として 32 年間在職（1911～1942 年）

1925 年ポール・ハリスはペリーを第 1 回連合体の大会の召集などに対し「ロータリーで、私以外の人物が何かを率先したのは、あの時が初めてだった」と賞賛している。

ロータリーは横並びの社会

新会員の皆様を対象とした、オリエンテーションであります。教育とか訓練とか言う言葉は不適切であります。よくロータリー誕生の背景としてこんなことが言われます。もし、ポール・ハリスが日本に生まれて、ロータリーを創ろうと思ってもできなかったであろう。

日本社会では、仮に事業を起こし開業をしようとする時には、自分に深くかかわりのある親戚縁者や、学校に先輩、地域や業界の顔役に相談し力を借りないとうまくいかないという縦の社会構造があります。

自分の故郷を捨てアメリカ社会で生きようとする人々は、友人を頼りにする、横の繋がりを大事にする、社会構造になっております。従って、ロータリー活動は、上意下達の世界ではなく十分議論をし、理解、納得をしたうえで行動に移すという合議組織でなくてはなりません。

日本ロータリーの原風景

日本にロータリーが誕生したのは 1920 年(大正 9 年)10 月に創立された東京クラブで、初代事務総長チェスレー・ペリーと米山梅吉、福島吉三次などの先達の功を忘れることはできません。しかし、この当時のロータリー会員は、超一流といわれる人々であり、奉仕活動をするというよりは、社交クラブ的雰囲気強く、例会も月 1 回程度でありました。しかし、1923 年(大正 12 年)の関東大震災を契機にして日本のロータリーは大きく変わっていきます。

ロータリアン

ロータリーの綱領は初期には 2 項目からいろいろの変遷して、1951 年に改訂された綱領の下に集った会員であることを肝に銘じて努力し実践していかなければなりません。

有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓舞し、これを育成する。

- 第 1 奉仕の機会として知り合いを広める
- 第 2 事業および専門職務の道德水準を高めること；あらゆる有用な業務は尊重されるべきであるという認識を深めること；そしてロータリアン各自が、業務を通じて社会に奉仕するために、その業務を品位あらしめること；
- 第 3 ロータリアンすべてが、その個人生活、事業生活および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること；
- 第 4 奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。

残した数々の教訓

関東大震災時の RI、RC の活動や東京ロータリークラブの活動は我々にさまざまな教訓を残してくれました。

第1 は対応の迅速さであります。当時の通信事情を勘案してみると驚く速さです。人間の好意とか誠意とかは対応の速さで違ってくることをすでに充分学んでいます。我々の援助活動を省みることは有益ではないでしょうか。

第2 は東京ロータリークラブの援助金の配分のあり方であります。食料や衣服という生活用品の提供ではなく、「人を対象」として「心に響く」ような援助を行っており、一つ一つ今何が必要であり、重点とすべき援助を何にするかを慎重に検討した後のしのばれ、「心」を持って援助を行っている点であります。私たちの現在の援助活動の背景「心」は果たしてどうなのか?それにつけても、明治育ちの日本人の「心」と「人格」はロータリアンとしてすでに世界水準を持ち、偉大だったと改めて認識と尊敬の念を新たにする次第です。

第3 は諸外国の援助状況の中で、大震災時の世界の援助によって、日本人が初めて世界社会を意識したといわれています。ロータリークラブにおいても、大震災以後各国の RC の人達が日本を訪れると会員は積極的にこれらの人々の招待を行い、また海外に出かけるときは先方の会員を訪問するという民間外交に発展させました。今日で言う国際交流は実にこのときに始まったということでもあります。

このように関東大震災をたどってみると差天座真名教訓に出会い、真に感慨深いものがあります。いうならば、関東大震災こそ日本ロータリークラブの「原風景」であり、永遠に記録し記念とすべきものではないでしょうか。

我々、日ごろのクラブ活動では「奉仕、即ち、与えるもの」のみになっているような感がある今、関東大震災の折の世界各国からの「援助」と「友情」を日本ロータリーの原点と改めて想起し、「心」と「人格」がこれからもロータリー活動のバックボーンであり続けるようにと念願したいと思います。

「与えられることを知ることは、与えることを知るに通じる」にではないでしょうか。

(参考文献)

奉仕の一世紀 (国際ロータリー物語)

2005-06 年度 2840 地区 新人研修セミナー 基調講演参照 2840 地区 清 章司 PG